

# ラス・カサスの「降伏勧告状」批判 ——懲罰戦争に対する神学的視座——

青野和彦

スペイン語で「レケリミエント」と呼ばれた「降伏勧告状」は、スペイン人ドミニコ会士パラシオス・ルビオスによって1513年に作成された法文書であり宣言文である。それによって、スペイン王室は西方インディアスと呼ばれた新発見地の支配とともに、同地域の先住民のキリスト教化も合法化することが可能となった。さらに、先住民がその受け入れを拒否した場合、「懲罰戦争」によってかれらを征服することも正当化された。

スペイン人ドミニコ会士、バルトロメー・デ・ラス・カサスは『インディアス史』及び『すべての人々を真の宗教に導く唯一の方法について』のような著作において「降伏勧告状」を法的・神学的根拠を欠く文書と見なし、酷評した。彼は特に後者において先住民の自然権を擁護しつつ、自身のスコラ学的見解に基づいてこれらの根拠を否定した。

本稿では、懲罰戦争に関する彼の神学的視座について解明することを目的とする。その際、彼の「平和的布教」論に焦点を置きながら、16世紀スペインにおいて影響力を有したスペイン諸国王と教皇達の支配権論も参考に論じていく。そして、ラス・カサスの前述の著作を検証することで、彼はそのような無慈悲な戦争の行使が違法であるばかりか、神の救霊意志に完全に背馳するものであると確信したことが帰結される。つまり、ラス・カサスはその意志が神の善性から生じ、人種に関係なく全人類に及ぶと信じたのである。

キーワード：「降伏勧告状」(催告)、懲罰戦争、教皇至上権論、正戦論、平和的布教、愛徳、万民法、自然奴隷、神性

## はじめに

「降伏勧告状」(Requerimiento, 以下、「催告」)は、スペイン(アラゴン)国王フェルナンド2世(Fernando II, 在1479-1516)の要請を受け、教会法学者・スペイン王室顧問官パラシオス・ルビオス(Juan López de Palacios Rubios, 1450-1524)によって1513年に作成された。そこでは、スペイン国王によるインディアス(Las Indias)の支配とカトリック宣教師達による説教の受容が未征服地の先住民(indígenas)に要求された<sup>(1)</sup>。また、先住民がそれを拒否した場合、その懲罰としてのスペイン人征服者達による武力行使(以下、懲罰戦争)も先住民に通告された。そして、「催告」の直接的法源はローマ教皇アレクサンデル6世(Alexander VI, 在1492-1503)が發布した「贈与大教書」(Inter Caetera, 1493)にあった。つまり、同教書はスペイン国王とその後継者達に対しインディアスにおけるスペインの独占的領有権とカトリックの布教権を認可したものであり、「催告」はその権原に依拠して作成されたのである。そして、それは16世紀のスペイン帝国によるインディアス征服を

合法化する役割を果たした。

なお、ドミニコ会士ラス・カサス(Bartolomé de Las Casas, 1484-1566)は、先住民の文化と自然権を擁護する活動(indigenismo)を展開する過程で「催告」を酷評した。その言説は『インディアス史』(*Historia de las Indias*, 1875, 1562/63)第3巻第58, 63, 167章に顕著にみられる。つまり、彼はそれらの箇所では教皇とスペイン国王の権力論、正戦論そして布教論の観点から「催告」では認められる懲罰戦争の不当性を訴えたのである。また、ラス・カサスは『すべての人々を真の宗教に導く唯一の方法について』(*De unico vocationis modo omnium gentium ad veram religionem*, 1542, 以下、『布教論』)第5章第17節及び『新世界の住民を弁ずる書』(*Adversus persecutores et calumniatores novi orbis ad oceanum reperti*, 1552-1553)第26章でもスコラ学的論証に基づく「平和的布教」(evangelización pacífica)理論を根拠に懲罰戦争を否定した。以上の内容から、ラス・カサスの「催告」批判の核心にはその理論の思想的影響が看取される。そこで本研究では、前述の一次資料に見られる彼の布教理論に関する言説に着目し、彼が16世紀中期

に「催告」、特にそこで是認された懲罰戦争を批判した神学的視座の解明を目的にする。また、既述した教皇と国王の権力論や正戦論に関する彼の見解も考察の射程に入りたい。

因みに、本研究の主題を扱う神学分野の先行研究は管見の限り、希少である。中でもペルーの神学者グティエーレスは、戦争と布教との関係に関するラス・カサスの見解を分析する際、彼が「催告」を批判した理由に言及する。つまり、グティエーレスは「催告」の狙いが戦争の正当化にあった点、さらにラス・カサスが「催告」をキリスト教信仰への自由な受容という神学の最も重要な前提を欠く文書として否定した点も指摘する<sup>(2)</sup>。特にラス・カサスが「催告」を問題視した理由は、同文書の神学的内容に神と隣人への愛そして信仰についての省察が欠落していた点にあった<sup>(3)</sup>。また、筆者は以前の研究において『インディアスの破壊に関する簡潔な報告』(*Brevísima relación de la destrucción de las Indias*, 1552, 以下、『簡潔な報告』)にみられるラス・カサスの反征服戦争論を考察した際、彼が先住民に臨む神の救霊意志を最重視する「神権主義」の立場から征服戦争を罪悪視し、非難した点に論及した<sup>(4)</sup>。しかし、それは「催告」を主題とはせず、また戦争を懲罰戦争のみならず侵略戦争も包摂する概念で捉えた研究であった。それゆえ、本研究の主題を論考する際、「催告」で特定される懲罰戦争に焦点を当てる必要がある。

さらに、これらの研究には次の課題も指摘されるであろう。一つ目は、ラス・カサスが懲罰戦争を反駁したところの布教理論にみられる神学的根拠の解明である。なぜなら、前述のとおり、彼は自身の布教理論の観点から懲罰戦争を神学的に批判したからである。また、この考察により、グティエーレスが指摘するように、ラス・カサスが神と隣人への愛の観点や信仰についての省察を欠く「催告」を問題視した理由も明らかにされよう。二つ目は、前述のラス・カサスの神学的根拠にみられる思想的特徴の検討である。そのために、懲罰戦争に論及した同時代のスペインの著名な神学者達、特にサラマンカ大学神学教授ビトリア (Francisco de Vitoria, 1486-1546) と神学者・人文学者セプールベダ (Juan Ginés de Sepúlveda, c. 1489-1573) の見解との比較検討が肝要となる。この検討によってラス・カサスの「催告」批判の神学的視座とともに、16世紀半ばのスペイン神学界における彼の思想的特色も鮮明になろう。

そこで、本研究では次の方法を用いる。まず、ルビオスが「催告」において懲罰戦争を正当化した教皇とスベ

イン国王の権力論の法的根拠を確認するため、インディアスにおけるスペインの征服と支配の正当性を論じた『大海の諸島について』(*De insulis oceani*, 1512) を読解する。次に、前述の一つ目の課題を考察するため、さらに二つの方法を用いる。第一に、先のルビオスの法的根拠に対するラス・カサスの反証を明らかにするため、「催告」に対する詳細な批判がみられる『インディアス史』第3巻第58章を中心に読解する。第二に、そのラス・カサスの反証を彼の布教理論と検討する。その際、体系的かつ神学的な布教理論がみられる『布教論』に注目する。そして、前述の二つ目の課題を考察するため、ビトリアの特別講義及びセプールベダの著作にみられる懲罰戦争に関する各々の見解と検討する。最後に、以上の検討に基づきラス・カサスの神学的視座について結論する。

なお、本稿においてラス・カサスの一次資料を引用する際、彼の最新の著作全集であるラス・カサス協会版<sup>(5)</sup>を使用する。

## 1. 「催告」にみられる懲罰戦争是認の根拠

「催告」の骨子については前述のとおりであるが、まず、それをさらに概観し、その性質を確認する。「催告」では聖書に基づき天地創造を説いた後、全世界の支配権が神に選任されたペトロ、さらにローマ教皇達へ移譲され、アレクサンデル6世がスペイン国王にインディアスを贈与した経緯が説明される。続いて、催告の主要部分が通達される。第一に、前述の内容の十分な理解、第二にカトリック教会と全世界の支配者としてのローマ教皇の承認とインディアスの島嶼部と大陸部を統治するフェルナンド王とフワナ女王 (Juana, 在1504/1516-1555) の君主権の承認、第三にカトリック修道士達による説教の受容とそのための場の提供、となる。さらに、先住民がこの催告を承認した場合、かれらは厚遇されるが、拒否した場合、前述の懲罰戦争によってカトリック教会とスペイン国王に強制的に従属させられる旨がスペイン語でまたは通訳を介して通告される。なお、「催告」はアービラ (Pedro Arias de Ávila, c. 1440-1531) やコルテース (Hernán Cortés de Monroy y Pizarro, 1485-1547) 等のスペイン人征服者達によって携行され、1550年のチリの先住民征服の際にも使用された。

この概略から、「催告」は「贈与大教書」を根拠にスペイン側の利権を一方的に要求する形式的な法文書であったことが明白である。また、山内が評するように、それは法の尊重よりもその編纂の方を重視するスペイン

人の「法律尊重主義」(legalismo)の産物でもあったと言える<sup>(7)</sup>。より大局的に捉えれば、「催告」はスペインによるインディアス征服の正当性をめぐる「インディアス論争」(controversia de las Indias)に対するスペイン王室の回答であると言える。一方、先住民のキリスト教化については、デルガドが指摘するように、確かに「催告」ではかれらに説教者つまり宣教師の受け入れが要求されたものの、改宗自体は強制されなかった<sup>(8)</sup>。しかし、その法源となる「贈与大教書」によってスペイン国王にインディアスの新発見地における先住民の改宗化が義務づけられた点を考慮すると、「催告」は事実上、改宗を要求する文書であるとみなされる。

次に、「催告」において懲罰戦争を是認したルビオスの理論的根拠について彼の『大海の諸島について』を手がかりに考察する。

第一に、教皇とスペイン国王の支配権に関するルビオスの言説に着目する。なぜなら、前述のとおり、「催告」では双方の権力への帰順が先住民に要求されるからである。ルビオスはそれについて主に同上書第2～3章で言及する。そこでの主張の要点は次のとおりとなる。つまり、①自然法の観点から先住民は防衛権を有するが、「贈与大教書」の効力によりかれらの財産管轄権は教皇に移譲される、②先住民はスペイン国王のインディアス領有と宣教師を受け入れる義務が生じる、③先住民がこれらの要求を拒否した場合、スペイン側の武力行使や財産の剥奪や戦争捕虜の獲得が正当化される<sup>(9)</sup>、となる。

第二に、懲罰戦争に関するルビオスの言説に注目する。彼はそれについて主に同上書第2～3章で言及する。そこでの彼の主張もまた、①教皇によるスペイン国王に対する権力移譲の承認、②宣教師の受容、となる<sup>(10)</sup>。つまりそれは先住民が要求を拒否した場合、かれらの財産の剥奪と奴隷化が正当化されるという強権的内容である。特に布教との関係で注目すべきは、ルビオスが福音書のキリストの「12弟子の派遣」の記事を引用し、まず未信者に対するキリスト教の平和的説諭を勧める点である<sup>(11)</sup>。しかし、ルビオスは旧約聖書「申命記」20:10-13の降伏勧告の掟やスコットランドの哲学者メイジャー(John Major/Mair, 1496-1550)の教説から、未信者が宣教師達を拒否した場合の武力行使や国王による処罰権の正当性も傍証する<sup>(12)</sup>。

これらの言説から、ルビオスは懲罰戦争を是認しうる最大の根拠を教皇至上権論に求め、その観点から未信者に対するスペイン国王の交戦権を正当化したことが明らかになる。因みに、スペインの神学者パス(Matías de

Paz, c. 1468-1519)も『インディアスに対するスペイン国王の支配権論について』(*Del dominio regum Hispaniae super Indos*, 1512)でキリストの代理者である教皇から権威を授かったキリスト教君主達は全世界に対して布教義務を持つと考え、また未信者達がキリスト教信仰を拒否した場合の戦争も正当化した<sup>(13)</sup>。

なお、サバラが指摘するように、特にルビオスの見解は中世期の教皇インノケンティウス4世(Innocentius IV, 在1243-1254)と教会法学者ホスティエンシス(Henrico de Segucio [Hostiensis], c. 1200-1271)の教皇至上権論を基調とする<sup>(14)</sup>。つまりそこでは、カトリック教会はたとえ自然に反しても未信者を処罰可能とするインノケンティウスの理論とキリストの代理者である教皇は全世界の未信者に対して普遍的権力と裁治権を持つとするホスティエンシスの理論が融合するのである。そしてこの観点から、ルビオスは教皇権を王権の上位に位置づけ、スペイン国王に下賜された「贈与大教書」の法的効力によってインディアスで帝権と布教権を確立できるという理論を構築した。また、その背景には征服者であり地理学者でもあったエンシソ(Martín Fernández de Enciso, c. 1469-c. 1533)の思想的影響もうかがえる。ハンケによると、エンシソはスペイン国王宛の請願書の中でインディアスを旧約聖書「ヨシュア記」に示される「約束の地」・カナンに譬え、先住民が慣行していた偶像崇拜を理由にスペインの征服戦争と支配を正当化した<sup>(15)</sup>。

要するに、ルビオスはローマ教皇至上権論に基づく中世の征服理論やエンシソの主張を取り入れ、スペイン国王への先住民の帰順と宣教師の受容の正当性、さらに懲罰戦争の合法性を「催告」において結実させたと言える。続いてその根拠となる、①教皇とスペイン国王の権力論、②その効力に由来する戦争論、③懲罰戦争を伴う布教法の妥当性、に対するラス・カサスの見解を検証する。

## 2. 懲罰戦争に対するラス・カサスの反証

### 2.1 『インディアス史』にみられる反証

ここでは第一に、ローマ教皇およびスペイン国王の権力論に対するラス・カサスの見解について考察する。彼はそれについて、『インディアス史』Ⅲ-58で次のように叙述する。

インディオ(ママ)たち、とりわけ王や首長たちは、自分ら自身と祖先達が、何百年もの遠い遠い昔から、事実上の自由なる王(や首長)として自分た



ちの土地を領有してきたのに、聖ペドロだかその後継者の教皇だかが、エスパーニャ人の神の命に従って、彼らインディオの領地をスペイン人達の王に譲与した、ということを告げられた時、そして、王と首長たちがその臣下人民一同とともに、エスパーニャ人たちの国王を彼らの主君として受け入れるように、と告げられた時、彼らは一体どんな気持ちを感じたであろうか。<sup>(16)</sup>

ラス・カサスはこのテキストで先住民の心情に立ち、教皇の贈与に基づく国王の領有を一方的に通告する方法を問題視している。双方の権力に関する彼の見解についてさらに他の一次資料も参考に論じたい。まず、教皇の権力についてラス・カサスは『30の法的命題集』(*Treinta proposiciones muy juridica*, 1552)の第1～3命題で、教皇が信者・異教徒を問わず、全人類の上にキリストの權威と権力を持つと述べる。<sup>(17)</sup>ラス・カサスはその根拠を人々を救霊に導き、その障害を除去すべき教皇の任務に見出している。さらに、彼は『インディアスにおけるカステーリャ・レオン国王の普遍的支配権』(*Tratado comprobatorio del imperio soberano*, 1552, 以下、『普遍的支配権論』)「第2の結論」で教皇が全世界の上に世俗権を有し、人々を救霊へ導くために必要ながぎり財産権や地位を有すると述べる。<sup>(18)</sup>

次に、ラス・カサスは『インディアス史』Ⅲ-55, 『30の法的命題集』「第7命題」と「第15～17命題」でスペイン国王の権力について言及する。そこにおいてラス・カサスはインディアスでの先住民の改宗化に同国王による領有の根拠を見出している。そして、改宗化を実現するため、ローマ教会が同国王にインディアスの統治権を譲与したと明言する。但し、エルナンデスが『普遍的支配権論』について評するように、ラス・カサスはインディアスにおけるスペイン国王の帝権を承認しつつも、それがインディアスの王達と権力者達の支配と裁治権に適合するべきだと主張する。<sup>(19)</sup>そこから、ラス・カサスはスペイン国王による領有が専横的な性質にならないよう牽制したことが推察される。

これらの言説から明らかなように、ラス・カサスは教皇の霊的権力を普遍的なものと認めながらも、その世俗的権力については間接的なものに限定するべきだと考えた。その点でラス・カサスは、教皇が霊権と俗権を持ちながら、前者を高位聖職者達に、また後者を世俗君主達に委ねたと考えるルビオスと同意見であると言える。一方、スペイン皇帝のインディアス領有権について、ラス・

カサスは「贈与大教書」を法源と考える点ではルビオスと共通するが、先住民の王達の裁治権も尊重する点で異なる。それゆえ、ラス・カサスが問題視したのは教皇や国王の権力自体ではなく、インディアス先住民の同意を得ないままその権力への帰属を要求できるとする「催告」の強引な論理にあったと指摘できる。

第二に、「催告」に示される戦争に対するラス・カサスの見解を明らかにする。彼は『インディアス史』Ⅲ-58でその戦争について次のように叙述する。

(…) エスパーニャ人たちは一体どのような法と権利、どのような正義と正当性にもとづいて、インディオ(ママ)たちに要求している服従を、彼らがもし受け入れない場合には、彼らに放火と流血の戦争を仕掛け、その財産を没収し、彼ら自身とともにその妻と子どもたちを捕らえ、奴隷として売り渡すであろう、などと主張し、脅迫することができるのか。<sup>(21)</sup>

ラス・カサスはここで懲罰戦争を非難する。その根拠をより明確にするため、彼の正戦思想に注目する。彼は同上書Ⅰ-25で未信者に対する正戦要件を三つ示している。第一は、相手方による先制攻撃である。第二は、相手方の悪意ある布教妨害である。第三は、相手方によるキリスト教徒の領土や財産の不当な奪取とそれの返還あるいは譲渡の拒否である。<sup>(22)</sup>因みに松森によると、この正戦論は主に神学者トマス・アクィナス(Thomas Aquinas, c. 1224-1274)によって定式化された古典的正戦論を基盤としたものである。<sup>(23)</sup>特にラス・カサスはアクィナスの『神学大全』(*Summa Theologiae*, 1265-1274)の「戦争開始のための法」(*ius ad bellum*)に依拠し、前記の三つの正戦要件を理論づけている。因みに、アクィナスが示す正戦の開始要件とは、①「君主の權威」(*auctoritas principis*)、②「正当原因」(*causa iusta*)、③「戦争行為者の正しい意図」(*intentio bellantium recta*)<sup>(24)</sup>である。

まず、他の一次資料も参考にラス・カサスの第一の正戦要件から検討する。彼は『布教論』7:1においてインディアス先住民をキリスト教信仰や教会について知識を持たず、教会に対して攻撃したこともない「第三の範疇に属する異教徒」として分類する。<sup>(25)</sup>この言説から、彼は先住民を自身の第一の正戦要件やアクィナスの正戦要件②に該当しない民族として判断したことがわかる。

また、ラス・カサスは第二と第三の正戦要件についても先住民に対する戦争には該当しないと考える。なぜな

ら、彼は『簡潔な報告』『結辞』でキリスト教徒に対する先住民側からの先制攻撃は一度もなかったと断言するからである。<sup>(26)</sup>

さらに、彼はインディアスでのスペインの従来の戦争がアクィナスの正戦要件①「君主の権威」にも該当しないと考える。ラス・カサスはその理由として同上書「序言」でスペイン国王がインディアスの実情に関する詳細な報告を受けていなかった点を指摘する。<sup>(27)</sup>さらに、彼は『30の法的命題集』『第26命題』で先住民に対する戦争には君主の権威と大義が常に欠如した点も挙げる。<sup>(28)</sup>そして、ラス・カサスはアクィナスが挙げる正戦要件③も「君主の権威」を欠くゆえ、インディアスにおいて成立し得ないと帰結する。

第三に、懲罰戦争を伴う布教方法に対するラス・カサスの見解を考察する。彼はそれについて『インディアス史』Ⅲ-58で次のように記述する。

教会とはいかなるものであるかを理解するには、そしてひとが教会に服従すべき義務を負うには、まずあらかじめ、キリスト教の信仰がわれらに教えるすべての事を知り、かつ信ずることが前提となるのではないか。(中略)またキリストをそういう御方(三位一体に在る、教会の創設者)として自由意志で受け入れぬままに、教会と教皇の存在を信じることができず、また信じてもらえないのであれば、いかなる人間の法、自然の法、神の法によって、教会が存在すること、そして教皇が存在することを信ずるべき義務を負わされるのであろうか。<sup>(29)</sup>

ラス・カサスはここで先住民が教会や教皇を承認するための前提として、事前のキリスト教教育の必要性とかれらの自由意思に基づくキリスト教信仰の受容の重要性を説く。そして、彼はこの観点から実質的な布教を省略した「催告」の欺瞞性を暴露する。また、彼はそれを「改善のための覚書」(*Momorial de remedios*, 1542)でも克明に伝える。つまり、彼はそこにおいて先住民の改宗化のために甘美な言葉による説教と宣教師の垂範こそが必須条件であることを国王カルロスに具申し、「催告」無用論を唱えるのである。<sup>(30)</sup>さらに、同様の観点は『インディアス史』『序言』にもみられる。つまり、ラス・カサスはそこにおいてキリスト教的慈愛に基づく改宗化こそが、教皇がスペイン国王に統治権を与えた真の理由であると明言するのである。<sup>(31)</sup>そしてこの観点に立ち、ラス・カサスは同上書Ⅲ-167で先住民にキリスト教の教義に

ついて熟考するための十分な時間を与えず、徒に「催告」を朗読する征服者達の杜撰な方法を非難した。<sup>(32)</sup>

以上の考察から、教皇の世俗的権力とスペイン国王の帝権を絶対視する立場から懲罰戦争を是認したルビオスと異なり、ラス・カサスは先住民を他の非キリスト教徒と峻別し、またスコラの正戦論を再構成することで懲罰戦争を反証したことが明らかになる。同時に、彼は教皇と同国王の支配権を承認しながらも、その支配がキリスト教的慈愛を伴う布教を前提にするべきとの見地からも懲罰戦争を否定したと言える。それゆえ、ラス・カサスの平和的布教理論からも懲罰戦争に対する彼の見解を検討する必要がある。

## 2.2 『布教論』にみられる神学的反証

ここでは、『布教論』の読解を中心に前述の検討を行う。まず、『布教論』5:17の文脈と概略を確認する。ラス・カサスは『布教論』5:1で「平和的布教」のための命題を立てる。それは、全世界の救霊予定者を救霊に導くために「神の摂理」(*Providentia divina*)によって定められた唯一の方法が、人間の理性を介して知性に働きかけ、意志を信仰の決断に導くというものである。<sup>(33)</sup>そして、彼は『布教論』5:15-18でその命題を神が人間の救霊のために受肉した存在であるイエス・キリストが、弟子達を布教に派遣する際に教示した平和的布教方法を根拠に論証する。『布教論』5:17はこの文脈の中で未信者がキリスト教の説教を拒絶した場合、かれらに対する戦争や懲罰を禁止する理由を示す部分となる。

次に、テキストからその理由を考察する。ラス・カサスはそれについて次のように叙述する。

ここから看取されるように、キリストは弟子達に福音を聞きたいと思う人々にそれを説教する許可と権限を与えたのであって、それを望まない人々に何らかの苦痛や不快を与えたり加えたりする許可や権限を認めなかった。キリストは聞きたくない人々を強制したり、彼らをその町から追放する者を処罰したりすることを弟子達や信仰の説教者達に認めなかった。むしろ彼らを処罰でなく、永遠の罰によって苦しめることを定めた。<sup>(34)</sup>

ラス・カサスはキリストによる「12弟子の派遣」に依拠してこの勧告を行なう。ここで彼は布教を拒否する人々に対する懲罰を「最後の審判」に委ねている。また、彼は『新世界の住民を弁ずる書』第26章でも「マタイ

による福音書」10:15を引用し、伝道者が受け入れを拒否された際、その罪が最後の審判時まで保留される人々から退去すべきだと説く。<sup>(35)</sup>この点でラス・カサスの見解は同じ聖句を引用しながらも、「申命記」20:10-13の降伏勧告の掟をより強調して戦争を正当化したルビオスのものとは異なる。また、ラス・カサスは報復を控えるべき理由として『布教論』5:17で報復が「神の審判を横領する」ことになると警告する。<sup>(36)</sup>つまり、ラス・カサスは信仰の始原が神にあるゆえ、布教を拒否された際の懲罰は世俗の権原に属しないと判断したのである。

さらにラス・カサスは、『布教論』5:17で次のように述べる。

人の子は救霊するために来たのであり、滅ぼすためではない。神が御子を世に遣わしたのは世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためであると言われるように、聖ヨハネ第3章によれば、<sup>(37)</sup>それは裁きの到来ではなく、憐れみの到来であった。

ここで、ラス・カサスは贖罪者キリストを介して人間を救済する神の「憐み」(misericordia)を示す。また、このテキストの直前においてラス・カサスは貧しい被抑圧者を解放するためにこの世界にキリストが到来した出来事のうちに神の「憐み」を見出している。<sup>(38)</sup>さらに、ラス・カサスはキリストの忍耐強く優しい布教によってサマリアの町の住民が改宗したという新約聖書の事例を挙げ、<sup>(39)</sup>キリストの布教に対する姿勢の中にも神の「憐み」を見出している。つまり、引用文の文脈からも明らかのように、ラス・カサスは神の「審判」以上に人々をこの世界で救霊し、困窮する者を解放する神の「憐み」を布教において強調するのである。

続いて、ラス・カサスは『布教論』5:18で神学者クリソストモス(Ιωάννης ὁ Χρυσόστομος, c. 347-407)の『マタイ福音書説教』(*Homilia 34 super Mattheum*)を引用し、柔和と忍耐をもって人々を悔悛に導くべき説教者達の使命を説く。<sup>(40)</sup>その際、ラス・カサスは説教者達が武力を伴って教義を説くことを戒め、人々の傷を共有すべきことを強調する。<sup>(41)</sup>因みに、彼は『新世界の住民を弁ずる書』第25章で戦争による強制的改宗について言及する際、それがキリストを侮辱し、その贖罪を無効にする行為であると非難する。<sup>(42)</sup>

また、『布教論』においてラス・カサスが懲罰戦争を戒めた理由を考察する上で注目すべき神学概念が「愛徳」(caritas)である。なぜなら、マルドナドが指摘するよ

うに、ラス・カサスにとって「愛徳」はキリストの使信の本質であるからだ。<sup>(43)</sup>因みに、彼は『布教論』5:6-7において説教の聞き手が神からの恩恵を受け、知性と意志を働かせることで信仰に到達できると論じる。そして、ラス・カサスはこの信仰の形成過程において「愛徳」を人間の信仰を完成させ、人間を究極目的としての「至福」に導く動因として捉える。<sup>(44)</sup>なお、この観点はアキナスの神学理論に依拠したものである。つまりアキナスによると、「愛徳」は神を始原とし、神自らの至福を人間に分かち与える愛であり、「恩恵の賜物」(dona gratia)なのである。<sup>(45)</sup>そして、この愛ゆえに人間は神、自分そして隣人を愛することが可能になる。<sup>(46)</sup>ラス・カサスはこの教説に示される神の恩寵を重視し、「催告」による形式的なキリスト教の告知ではなく、「愛徳」によって聞き手の信仰を至福に向けて成長させていく実質的な布教を目指したと言える。

さらに、ラス・カサスは『布教論』6:4で「愛徳」について次のように説明する。

愛徳はわれわれが神自身や隣人をマタイ22章に従って愛する愛情であり好みである。「自分の心を尽くして、精神と思いを尽くしてあなたの神である主を愛しなさい。これが最も重要な第一の教えである。二つ目もこれと同様である。あなた自身のように、自分の隣人を愛しなさい。これらの掟の中にすべての律法とすべての預言者が要約される」。そして、Iヨハネで言われる。「われわれは神からこの掟を持つ。神を愛する者は、その兄弟も愛する」。<sup>(47)</sup>

ここでラス・カサスは、「愛徳」が神と隣人を愛する徳であると述べる。彼は双方の愛の一体性について『布教論』6:5でアウグスティヌス(Aurelius Augustinus, 354-430)の『三位一体論』(*De trinitate*, 400-c. 420)第8巻第8章等から傍証した上で、「愛徳」を次のように解釈する。第一に、それは神、隣人そして自分への愛を相即的かつ不可分の愛である。第二に、それは困窮する者や「最も小さき者」の善を求める徳である。<sup>(48)</sup>つまり、ラス・カサスが『布教論』6:5で明言するように、隣人愛を欠く神への愛は成立しえないのである。ラス・カサスはそこにおいて独自の神学理論を展開していないが、アウグスティヌスの「愛の三一性」に依拠して隣人愛の重要性を説く。因みに、アウグスティヌスは「ヨハネの手紙一」2:10を根拠に義の完成を兄弟愛に置いて<sup>(49)</sup>いる。さらに同手紙4:7-8に基づき、その兄弟愛が神



から発出するだけでなく、端的に神そのものでもあると明言する<sup>(51)</sup>。それゆえ、神と隣人への愛の掟が示すように、われわれ（自分）が愛からして兄弟を愛することは神からして兄弟を愛することであると論ずる。この理論に従えば、隣人愛は神への愛の試金石となる。要するにラス・カサスはアウグスティヌスの言説を踏まえ、「神—自己（スペイン人）—隣人（先住民）」という思想的構図を描いたのである。さらに、ラス・カサスはこの構図の中で先住民を困窮する者、キリスト教徒が「愛徳」を実践すべき対象として捉えている。そこから彼は、先住民に対する懲罰戦争を「愛徳」の働きを妨害する瀆神行為と考えたとと言える。

また、ラス・カサスはインディアスで「催告」が使用された状況にも着目し、そこから懲罰戦争を批判した。実際、「催告」は先住民首長達を辟易させるものであった。その例として、彼は『インディアス史』Ⅲ-58, 63で現コロンビアのカルタヘナ付近のセヌーの首長達(caciques)が事前の諒解もなく、かれらの領地をスペイン国王に譲与した教皇の判断に疑念を抱いたという挿話を紹介する<sup>(53)</sup>。これは、「催告」が先住民にとって説得力を欠き、懲罰戦争も不当な侵略手段であった事実を示す好例となる。同時にそれは、先住民の不利な状況を克明に伝える挿話でもある。つまり、トドロフが指摘するように、先住民は征服に屈して農奴となるか、それとも武力に屈服し奴隷と化すか、二つの劣等な立場しか持たなかったのである<sup>(54)</sup>。特にラス・カサスが懸念したのは、彼が『簡潔な報告』で叙述するように、「催告」がスペイン人征服者達による殺戮や略奪行為を正当化する方便と化したことであった<sup>(55)</sup>。また、松森が指摘するように、同文書はスペインによる戦争を正当化し、「エンコミエンダ制」(encomienda)とともにスペインによるインディアスの統治基盤となった<sup>(56)</sup>。それゆえ、彼は「催告」を先住民の自由意思を封殺し、「愛徳」による信仰の形成を目指す平和的布教も妨害し、残虐な征服による統治を既成事実化する元凶と考えたとと言える。また、この点において先に挙げたグティエーレスが指摘する、ラス・カサスが「催告」を欠陥文書として批判した理由も見出されよう。

### 3. 懲罰戦争に関するビトリアとセプールベダの見解との検討

では、ラス・カサスと同時代のスペイン人神学者達は「催告」において是認される懲罰戦争をどのように捉えたのだろうか。まず、ビトリアの見解について彼が

1539年にサラマンカ大学で行った講義「インディオについて」(*De indis*, 1539)を参考に考察したい。彼は同講義で「催告」に直接言及していないが、その第二部において先住民がキリスト教信仰を形成する上で障害となるという観点から懲罰戦争を否定している。つまり、ここでの彼の観点は、信仰は自由意志の働きであり、恐怖心はそれを非常に弱めるゆえ、先住民がキリスト教を拒否した場合の武力行使は正当な理由になりえないというものである<sup>(57)</sup>。むしろビトリアは、キリスト教徒達は先住民を隣人とみなし、かれらを愛と兄弟の親しみをもって善導すべきだと説く<sup>(58)</sup>。さらに、彼は「インディオについて」第三部で布教を「マルコによる福音書」16:15のキリストの世界宣教命令に基づく「万民法」(ius gentium)<sup>(59)</sup>上の行為として捉える。しかし反面、ビトリアは先住民が脅迫によって「万民法」で本来保障されるべき布教権を侵害した場合、スペイン人達は戦争を行使できると述べ、布教妨害を正戦の理由と考える。また、彼は前述のように第二部で先住民を隣人とみなしながらも、第三部でかれらは自治能力に欠けるゆえ、知性ある者に庇護されるのが妥当であると判断する<sup>(61)</sup>。このように、ビトリアは節度なき戦争や懲罰戦争を理論的に牽制しつつも、「万民法」の一つである布教権擁護の観点から条件付きの戦争を容認するのである。この観点には「万民法」の違反に対する処罰を正当化するスペイン側の論理も反映されている。さらに言えば、佐々木が分析するように、そこにはスペイン帝国擁護論者としてのビトリアの立場も看取される<sup>(62)</sup>。

次に、セプールベダの見解に注目する。彼は懲罰戦争のみならず、布教前の征服戦争も支持する。彼は次の観点から戦争を正当化する。第一に、彼の先住民観である。つまり、『戦争の正当原因に関する著作のための弁明』(*Apologia, pro libro de iustis belli causis*, 1550)で示すように、彼は先住民が思慮分別を弁えず、偶像崇拜や人身犠牲を行う、悪習に染まった野蛮人であると考え、それを矯正する手段としての戦争を正当化するのである<sup>(63)</sup>。第二に、布教拒否である。つまり、彼は『第二のデモクラテス』(*Democrates secundus, sive de iustis belli causis*, 1892年公刊)で先住民に対し事前の勧告と時間的猶予を与えたのち、かれらがそれを拒否した場合、懲罰戦争を正当化するのである<sup>(64)</sup>。第三は、「贈与大教書」の法的権限である。つまり、セプールベダは「贈与大教書」を發布した教皇の権力論の根拠を「マタイによる福音書」20:18-20に見出す。そこからさらにセプールベダは同教書を教皇が先住民を服従させるためにスペイン国王に

下賜した文書として捉え、その観点から先制攻撃による支配を妥当と考えるのである。<sup>(66)</sup>これらの言説から明らかなように、セプールベダは覇権主義的観点に立ち、「贈与大教書」に依拠してスペイン帝国の征服理論を擁護することで懲罰戦争や征服戦争を正当化した。アベリヤーンが指摘するように、特にこの観点にはセプールベダの戦争主義とスペイン人の軍事的能力に対する礼賛が通底する。<sup>(67)</sup>

では、ビトリアとセプールベダによる懲罰戦争に関する見解をラス・カサスのそれと検討しよう。ラス・カサスの見解は、キリストの世界宣教命令を根拠に先住民に対するキリスト教教育の必要性を説いた点でビトリアのそれと共通する。その際、両者はアウグスティヌス—グラティアヌス—アキナスを主要な系譜とするスコラ学的観点から布教の意義を唱えた。また、ラス・カサスは布教拒否を戦争の正当要件と考えず、隣人愛をもって布教するべきだと考えた点や布教妨害を正戦理由に挙げた点でもビトリアと類似する。しかし、布教妨害に関して言えば、ラス・カサスの見解は結果的にビトリアのそれと異なる。なぜなら前者は『簡潔な報告』『結辞』で略奪によって宣教師達の布教を妨害したのは、むしろスペイン人征服者達であったと断言するからである。<sup>(68)</sup>

何よりも懲罰戦争の是非について言えば、ラス・カサスは前述の学者達と顕著な主張の相違がみられる。つまり、それは先住民の「野蛮性」を理由に戦争を正当化するセプールベダの見解である。さらに付言すれば、ラス・カサスの見解は教皇至上論の立場から戦争を是認したルビオスやパスのそれとも異なる。特に彼らが懲罰戦争を是認する底流には、程度の差こそあれ、先住民を劣等あるいはビトリアが考えたようにスペイン人の後見が必要な民族とみなす人種主義（racism）が看取される。特にセプールベダはそれをアリストテレスの『政治学』<sup>(69)</sup>（Πολιτικά）第1巻第5章にみられる「自然奴隷」説から敷衍する。また、彼らにはラス・カサスが唱えたような「愛の三一性」という神学的枠組の中で先住民を捉える発想もみられない。その意味で、ラス・カサスと前記の学者達が懲罰戦争の是非を判断する際、先住民の自然本性（natura）に対する認識の質や度合いが大きな分岐点となったと指摘することができる。

確かに、ラス・カサスには特にビトリアと比肩しうるほどの精緻な神学的論証は殆どみられない。しかし、前述の発想のうちにラス・カサスの神学的独創性が見出される。またその根底には先住民がスペイン人の農奴や被後見人や「自然奴隷」ではなく、むしろスペイン人と同

様、キリスト教を知解し、受容し得る「理性的被造物」であるという先住民認識もみられる。なお、それはラス・カサスがエスパニョーラ島のサント・ドミンゴ（現、ドミニカ共和国、1522–1526年）での修道生活のみならず、キューバ島での従軍体験とスペイン軍による虐殺の目撃（1512年）、二度の回心（1514年と1522年）そしてグアテマラでの布教実験（1537年）を経て形成した認識であると言える。<sup>(70)</sup>

## おわりに

ラス・カサスは前述の神学的フレームの中で先住民を「隣人愛」の対象として位置付けた。そして、彼はこの観点からかれらに対する懲罰戦争と共に「催告」自体も否定したと言える。この隣人愛観にはアウグスティヌスとともにアキナスの救済論が思想的支柱となる。つまりその理論によると、神は人間を救済するために人間に恩恵を与える。その神的扶助を得て人間は理性的認識と自由意思に基づいて信仰を形成する。さらに、神は自らの恩恵から人間に「愛徳」を授け、それに与る人間は自分、隣人そして神を愛することが可能になり、「至福」へと導かれる。特にこのプロセスにおいて重要なのは、恩恵を受ける神が「隣人愛」と人間の救済の始原となる点である。また、ラス・カサスはイエスに受肉した神を、『布教論』の前述の箇所では人間を苦しみから解放し、救済するために贖罪を成し遂げた存在として捉えた。そして、ラス・カサスはこの神の謙卑のうちに、被抑圧者と「共苦する」神の本性的愛を見出したと言える。つまり彼によると、それは人間、特に社会的弱者の苦悩を進んで共有し、かれらの救済を志向するという神の善性から発出する愛である。そこに着目すると、この神性に関する認識論すなわち神論がラス・カサスの隣人愛観の神学的視座であると帰結される。なお、本稿冒頭で言及した彼の「神権主義」はこの「神論」に包摂されよう。なぜなら、そこにみられる彼の創造論、救済論、さらにそこから派生する彼のキリスト教的ヒューマニズムは、神を始原・第一動因として成立するからである。

確かに、ラス・カサスの神論はヨーロッパ中世期の伝統的神学からの発展性は殆んどみられない。しかし、その理論の教義的正統性ゆえに、「催告」と「エンコミエンダ制」によるインディアスの征服と支配が進行する歴史的状況にあって彼はルビオスやセプールベダの「征服ありきの」の支配権論や懲罰戦争は認論を反駁し得たと言える。換言すれば、ラス・カサスはその伝統的神論に



立つことで、彼らの思想的な中核をなす教皇権至上主義や自国優先主義的なキリスト教観を是正しようと試みたのである。

最後に、彼の思想的影響にもふれたい。国王カルロスはインディアスにおけるキリスト教化及び先住民を国王に臣従させるための適正な方法を検討するため、1550年、スペインのバリャドリッドにて審議会(junta)を招集した。同会議の開催は、征服の在り方を検討するためにラス・カサスがインディアス枢機会議に提出した上申書が契機となった。また開催中、彼はセプールベダと有名な論戦を展開した。その争点と双方の主張の詳細については今後の研究で論じるが、そこでの彼の論点の核心には彼が『新世界の住民を弁ずる書』で開陳した先住民観と平和的布教観がみられる。彼はそれらの観点に立ち征服の罪性を暴露したのであるが、カルロスを審議会開催へと決断させた点にラス・カサスの前述の神論の思想的影響の片鱗がうかがえる。

(本稿は2019年12月7日、聖心女子大学において開催された「キリスト教史学会東日本部会」で筆者が発表した『降伏勧告状(Requerimiento)』に対するラス・カサスの神学的批判—布教拒否に伴う懲罰的戦争をめぐる—という論題の研究に加筆・修正を行ったものである。)

#### 引用文献及び注記

- (1) その要求の背景として、1512年に開催されたブルゴス会議が挙げられる。そこではインディアス先住民の虐待防止策やキリスト教化の他、征服戦争の正当性について神学者や法学者間で議論された。なお、本稿では「インディアス」という用語を16世紀のスペイン征服地(現西インド諸島及び中南米大陸)を指して用いる。
- (2) G. Gutierrez, *En busca de los pobres de Jesucristo, el pensamiento de Bartolomé de Las Casas*, Lima: Instituto Bartolomé de Las Casas, 1992, p. 167; p. 170.
- (3) *Ibíd.*, p. 170.
- (4) 青野和彦「ラス・カサス『インディアスの破壊に関する簡潔な報告』の反征服戦争論—布教的観点からの考察—」『沖縄キリスト教短期大学紀要』(第45号), 沖縄キリスト教短期大学, 2017年, 1-13頁。
- (5) *Obras completas de Fray Bartolomé de Las Casas*, 14 tomos, Madrid: Alianza Editorial, 1989-1998. なお範例として、本稿で一次資料を引用する際、以下の注では、*Obras completas*, 巻数, 頁数またはfolium番号の順に表示する。また、本稿で頻繁に引用する『インディアス史』の巻・章及び『布教論』の巻／章・節の表記は次のように略記する。

例:『インディアス史』Ⅲ-58,『布教論』5:17。そして、聖書の章・節について次のように表記する。例)「申命記」20:10。

- (6)「催告」の原文は次の文献に所収のものを使用した。Cf. P. C. Delgado, *La teocracia pontifical en las controversias sobre el Nuevo Mundo* (Serie C, Estudios históricos, 59), México: Universidad Nacional Autónoma de México, Instituto de Investigaciones Jurídicas, 1996, pp. 397-398.
- (7) 山内進『正しい戦争という思想』, 勁草書房, 2006年, 77-78頁。
- (8) Delgado, *op. cit.*, p. 418.
- (9) *De las islas del mar océano* por Juan López de Palacios Rubios; *del dominio de los reyes de España sobre los indios*, por Fray Matias de Paz (Biblioteca americana, serie de Cronistas de Indias), introducción de S. Zabala, traducción, notas y bibliografía de A. M. Carlo, Fondo de Cultura Económica: México-Buenos Aires, 1954, pp. 34-37; 55-56.
- (10) *Ibíd.*, p. 37. なお、「12弟子の派遣」は「マタイによる福音書」10:5-15,「マルコによる福音書」6:7-13,「ルカによる福音書」9:1-6を参照。
- (11) *Ibíd.*, pp. 37-38.
- (12) *Ibíd.*, pp. 37-38.
- (13) *Ibíd.*, pp. 215-216.
- (14) *Ibíd.*, introducción, XC.
- (15) L. Hanke, *The Spanish struggle for justice in the conquest of America*, Dallas: Southern Methodist University Press, 2002, pp. 31-32.
- (16) *Obras completas*, t. 5, 1994, p. 1999. 長南実・増田義郎注訳『ラス・カサス・インディアス史』(大航海叢書第Ⅱ期), 第4巻, 岩波書店, 1990年, 605頁。
- (17) *Ibíd.*, t. 10, p. 204.
- (18) *Ibíd.*, p. 400.
- (19) *Ibíd.*, t. 5, pp. 1987-1988: 邦訳, 第4巻, 582頁: *ibíd.*, t. 10, p. 205; 207-208.
- (20) *Ibíd.*, Introducción por R. H. Hernández, O. P., p. 391.
- (21) *Ibíd.*, t. 5, p. 2001: 邦訳, 第4巻, 609頁。
- (22) *Ibíd.*, p. 477-478: 邦訳, 第1巻, 1981年, 264-266頁。
- (23) 松森奈津子「ラス・カサスにみるインディアス戦争批判—正戦論の言説に則して—」(青山国際政経論集第59号), 青山学院大学国際政治経済学会, 2003年, 92-93頁。
- (24) *Summa Theologiae* (以下, *ST*), II-2, q. 40, a. 1.
- (25) *Obras completas*, t. 2, f. 192v. なお「第三の範疇に属する異教徒」とは、キリスト教君主の支配に服すユダヤ人やムーア人、キリスト教の領土を奪って占有するトルコ人や北アフリカのムーア人、法的に教会と教皇の臣下としてとどまる異端者や背教者、と区別される、法律上も事実上もキリスト教会に従属しない民族を指す。Cf. A. Remesal, O. P., *Historia general de las Indias Occidentales y particular de la gobernación de Chiapa y Guatemala*, estudio crítico preliminar y edición por J. P. T. Bueso, Biblioteca de autores españoles, t. 1, Madrid: Ediciones Atlas, p. 211; 染田秀藤『ラス・カサス伝—新世界

- 征服の審問者一』、岩波書店、1990年、120頁。
- (26) *Obras completas*, t. 10, p. 86.
- (27) *Ibíd*, p. 32.
- (28) *Ibíd*, p. 211.
- (29) *Ibíd*, t. 5, p. 2000; 邦訳、第4巻、607-608頁。
- (30) *Ibíd*, t. 13, p. 117. なお、これは「催告」に対するラス・カサスの批判がみられる最初の覚書である。
- (31) *Ibíd*, t. 3, p. 339; 邦訳、第1巻、31-32頁。
- (32) *Ibíd*, t. 5, p. 2501; 邦訳、第5巻、1992年、769-770頁。
- (33) *Ibíd*, t. 2, f. 2v. その命題の全文は次のとおり。「全世界、全時代のための1つにして唯一のものは、人間に真の宗教を教えるために神の摂理によって制定された方法であった。つまりそれは、理性をもって知性を説き、意志に甘美に魅力を与え、勧めるというものであった。そして、この方法は世界の全ての人々に宗教の違い、誤謬や陋習があったとしても差別されずに共通のものでなければならない」。なお、「神の摂理」とは『布教論』では神としての本性・実体を持ち、終末時まで人間を救霊へ導く働きをもつものである。青野和彦「バルトロメー・デ・ラス・カサスの『布教論』における摂理観—第5章を中心に—」『キリスト教史学』第60集、キリスト教史学会、2006年、123頁参照。
- (34) *Ibíd*, f. 64. なお、ラス・カサスが典拠とする聖句は「マタイによる福音書」10:5-15、「マルコによる福音書」6:7-13である。
- (35) *Ibíd*, t. 9, f. 120.
- (36) *Ibíd*, t. 2, f. 67.
- (37) *Ibíd*, f. 66. 「ヨハネによる福音書」3:16-17参照。
- (38) *Ibíd*, f. 65v. その際、ラス・カサスは「イザヤ書」61:1の預言も引用する。
- (39) *Ibíd*, f. 66v. 「ヨハネによる福音書」4:7-42参照。
- (40) *Ibíd*, f. 69 v.
- (41) *Ibíd*.
- (42) *Ibíd*, t. 9, t. 116v.
- (43) E. R. Maldonado, O. P., *Bartolomé de las Casas y la justicia en Indias, De unico vocationis modo omnium gentium ad veram religionem*, en *Ciencia Tomista*, tomo 101, Salamanca: Editorial San Esteban, 1974, p. 398.
- (44) *Obras completas*, t. 2, f. 25v. 青野和彦「ラス・カサス『布教論』の研究(3)—第5章第6-8節の宣教方法における信仰理解—」『キリスト教史学』(第62集)、キリスト教史学会、2008年、74頁参照。
- (45) *ST*, II-2, q. 23, a. 1; q. 24. a. 2; q. 26, a. 1.
- (46) *Ibíd*, II-2, q. 23, a. 1.
- (47) *Obras completas*, t. 2, ff. 160-160v.
- (48) *Ibíd*, ff 167v-168; 173v-174. さらに、次の論文も参照されたい。「バルトロメー・デ・ラス・カサスの『布教論』第6章における隣人愛の神学的視点—武力改宗への反証として—」『沖縄キリスト教短期大学紀要』(第33号)、沖縄キリスト教短期大学、2005年、81頁。
- (49) *Obras completas*, t. 2, f. 167v.
- (50) アウグスティヌス著・泉治典訳『アウグスティヌス著作集』(第28巻)、教文館、2004年、251頁。
- (51) 同上。
- (52) 同上。
- (53) *Obras completas*, t. 5, p. 1999; 2020. 邦訳(第4巻)、606; 646頁。なおこの挿話は征服者エンシソの『地理学要提』(*Suma Geografia*, 1519, 1530y 1546)に基づくものである。その他、「催告」が使用された詳細な状況についてはデルガドの文献も参照されたい。Cf. Delgado, op.cit., pp. 400-402.
- (54) T・トドロフ著・及川 馥、大谷尚文、菊池良夫共訳『他者の記号学—アメリカ大陸の征服』(叢書・ユニベルシタス)、法政大学出版会、1986年、204頁。
- (55) *Obras completas*, t. 10 (De la Tierra Firme), p. 44.
- (56) 松森奈津子『野蛮から秩序へ—インディアス問題とサラマンカ学派—』、名古屋大学出版会、2009年、53頁。なお、「エンコミエンダ制」はスペインの征服地住民をスペイン人受給者達(encomenderos)に一定数の先住民を割り当て、賦役・公租させる制度。受給者達はその特権を享受すると同時に先住民のキリスト教化の義務を負った。
- (57) F. Vitoria, *De indis et de ivre belli relectiones*, ed. by E. Nys, Washington: the Carnegie Institute of Washington, 1917, pp. 250-251; 伊藤不二男『ビトリアの国際法理論』、有斐閣、1965年、265頁。
- (58) *Ibíd*, p. 262; 邦訳、279頁。
- (59) *Ibíd*, pp. 257-267; 邦訳、269-288頁。なお、「万民法」とは伝道の権利の他、次の権原を意味する。交通の権利、通商の権利、共同参加の権利、海洋の自由、干渉の権利、戦争の権利。Cf. *Ibíd*, pp. 257-267; 邦訳、269-288頁。
- (60) *Ibíd*, p. 263; 邦訳、281-282頁。
- (61) *Ibíd*, p. 267; 邦訳、289頁。
- (62) F. ビトリア著・佐々木孝訳『人類共通の法を求めて』(アンソロジー新世界の挑戦6)、岩波書店、1993年、240頁。
- (63) 染田秀藤訳『セプールベダ・征服戦争は是か非か』(アンソロジー新世界の挑戦7)、岩波書店、1992年、9-12頁。
- (64) 同上、94-95頁。なお、『第二のデモクラテス』のラテン語原文は次の電子版を参照した。Cf. <https://jorgecaceresr.files.wordpress.com/2010/05/html> (2019年12月31日参照)。
- (65) 同上、146頁。
- (66) 同上。
- (67) J. L. Abellán, *Historia crítica del pensamiento español*, tercera parte, El siglo XVI, Madrid: Espasa-Calpe, S. A., 1979, p. 453.
- (68) *Obras completas*, t. 5, p. 86.
- (69) アリストテレスはそこにおいて人間の中には自然によって肉体が魂に、また動物が人間に劣るのと同じほど、劣る人々(奴隷)が存在し、それは生の保持のために有益であると述べる。これは16世紀のスペインにおいて国王の説教者メサ(Bernardo de Meza、生没年不詳)やダリエン(現パナマ一帯の地域)司教ケベド(Juan de Quevedo, c. 1450-1519)やスペイン王室官吏・記録者のオビエド(Gonzalo Fernández de Oviedo y Valdes, 1478-1557)によっ

て採用され、スペインのインディアス征服の合法性を支える理論となった。

(70) なお、グアテマラでは暫定的なものであったが、ラス・カサスは軍隊を随行しない先住民の改宗化に成功し、平和的布教の実効性を確信した。青野和彦「グアテマラにおけ

るラス・カサスの平和的布教観（1536-1538年）―布教方針と『布教論』原則との関連性の考察を中心に―」『キリスト教史学』（第69集），キリスト教史学会，2015年，137-159頁参照。

（あおの かずひこ）



# Las Casas' critique of the Notification (Requerimiento): His theological view point on 'punitive war'

Aono, Kazuhiko

## Abstract

The Notification, or the Requerimiento in Spanish, was a legal document or declaration that was written by Palacios Rubios, a Spanish Dominican jurist in 1513. It enabled the Spanish monarchy to legitimize its dominion over the newly discovered West Indies, which they called 'Las Indias,' as well as to Christianize the native inhabitants. It also justified how the Monarch would subjugate these people by a 'punitive war' if they refused to accept the Notification.

Bartolomé de Las Casas, a Spanish Dominican, harshly criticized the Notification, saying that it lacked both legal and theological grounds in several of his books such as "*The History of the Indies (Historia de las Indias)*" and "*The Only Way to Draw All People to a True Religion (De unico vocationis modo omnium gentium ad veram religionem)*." He also denied these grounds from his scholastic viewpoints, especially in the latter book, defending the natural rights of the indigenous people.

In this thesis, I aim to clarify his basic theological viewpoints on the punitive war, focusing on both his idea of 'peaceful evangelization' and referring to some dominant ideas on the sovereignty of the kings of Spain and the popes in 16th century Spain. Having examined Las Casas' books, including those mentioned above, I concluded that he was convinced that waging such a merciless war was illegal and totally contrary to God's salvific will, which he believed is caused by His goodness and applies to all humans, regardless of their race.

**Keywords:** The Notification (Requerimiento), punitive war, theory of the pope's supremacy, theory of just war, peaceful evangelization, charity(caritas), law of nations (ius gentium), natural slave, divinity